



十眼

山王縁起

全

教林文庫
文庫7
37



山王緣起

自第一至第四

山門橫河都率谷

雞頭院木山堂藏



嚴覺

前
難頭院本覺藏

早稲田大学
図書館蔵書

日本社津嶋六神國に於て類聚す此れ
をこころむる事所し神武天皇より人
代とすりてよまむ百の流流復の初て故
あつて崇神天皇の御時何しめて皇少流流
をばはりて皇少天皇の御時小天皇大神
天降りていしよるこころの崇神天皇
神とれりていしよるこころの崇神天皇
天皇天皇の御時何しめて皇少流流
ありまの天皇の御時何しめて皇少流流

Tokyo Univ

のひけりし南條乃一ねは本小幡の流す
の重の重をたるとるの佛はと
給ふとていふにせしむるは
上七帖と本と仰るは
この流すのすの
名はさきい
去大八崎金刺朝庭小三輪の神とあり
又のち津よめは流すは
とあり又おぼは
神は金也或は目枝とありし或は月六

山王流二一

とし寸是則流を
と月城下小施し給上江流すは
公の國受むる小御料因とら
献し時也及郷ハ中右大儒又曲守
精畫朝家小仕夜冥途小侍けり直
人小あらしきと其病と御承る
大津の八柳小天流す河川の
世痛舟小棹く湖の江小侍けり
此流一筋をちり一切ありま
名はせと多易のトマケ

山王流二一

あの中は流し流すと云ふは神は流し
に水とさしこむ也流しは小南崎に
流殿宇を凡の許小こまに流し二の時
粟の山新と云ふもつこは小南崎の
時南崎の山に小南崎の山と傳事今
小南崎に流し流しをなすは流し
山に流しは小南崎河を流し大宮の
及流しをなすは流しを流しは流し
山に流しは流しを流しは流しは流し
山に流しは流しを流しは流しは流し

こゝ恒世の田作此の神に成流生の神人
の先祖や宇志の歌に云ふは流しを
流しを流し一歌に云ふは流しを流し
流しを流し一歌に云ふは流しを流し
流しを流し一歌に云ふは流しを流し
流しを流し一歌に云ふは流しを流し
流しを流し一歌に云ふは流しを流し
流しを流し一歌に云ふは流しを流し
流しを流し一歌に云ふは流しを流し
流しを流し一歌に云ふは流しを流し

倒多の枯木如鳥の青鬼行り大所肉胎
之の汝何名を鬼神言ふ云来集に聖
人來る如像在眼刻す一これ那木
れ多ゆえり不の踏也此地を控ぬ只後
より海山本此二葉より守復之と志所
或後を家も一葉の居在流ひ形衣
在製一日七字小一葉の鏡院好も
船王向後是来りし葉師也来在造
像正一不度并如も一して云交礼也
尤の在れろ守不度りしと来来来也世

皇極經世一三

此我生必要を一法の心一折高の何也
此也ハ如像の法を流る大師云佛の
一院よここむこハ根中仲を葉師轉
法持を転也淨土院阿深院ありハ一
或ら定ハ執自在高意化傳也大師ハ
葉の道法を跡言えり此後身あり
桓武傳ありと然り葉師此種ありと
葉よ如生一これ法をこ後身白法
妙もらんこ法盛勅よら疾行りて天白
白字字ハ中多帝朝在来西傳又遷

大師、北極... 是依之... 二形正一如... 而後... 守... 門... 門... 云... 之... あり入唐...

山王... 卷一

か... とい... 海... 系... 神... 行... 深... 恒... 八...

山王... 卷一

又給勺木像中より被給つる扇を御座り
而のけち申りなむ責出られ奉り礼皮
解玉前をいし多此給りて居れ御氣
栞中此允傳西此の事より後志所ハ七世此不
動此新多之奉生て而の信此誓何何
少つ又たたすく明玉此傳又くくす而
酒何系くらし又前をせじ志り建ハ志所
約流せ先之安念をいり守り一然大
每此此吃めく何持く心中御念
せよこく朽へ給け何に後志所傳何

山王記卷一六

是何くを述べて不動言又まらばく此
在見何とこの志り何何元奉り此
大云此室あめく三古此あひと降志所
名此此在持後一給け建ハ後志所
の多り小なる園を興えんこ多又再給
之る三條如佛志所此古此在給入
樹給けり控現此事現何いひあつて
其く此何一何和尚二云れ此
造事これ何又寛平二年此大云此
宣又小此廟此室殿れしくい前を造

厚より一信何るに道、門被造り大至此
以平地、粉也如年有、悲死流云 吾身度
後 於法中 現大明神 唐度衣生こ
祝多由、大比叡控現、此より、何の體人、
信教せ、何人二宮在、此比、乞大、神、こ、
す、み地、至、控、現、こ、こ、何、苦、比、叡、山、横
何、よ、由、け、何、代、後、人、社、權、在、作、業、在、也
こ、い、多、り、在、志、す、後、小、り、此、大、至、此、油
社、れ、後、又、り、け、何、こ、こ、生、何、也、大、至、よ、さ、つ、後
い、て、東、の、稻、村、へ、移、良、也、此、路、何、り、志、社、よ、
い、て、東、の、稻、村、へ、移、良、也、此、路、何、り、志、社、よ、

山王經卷一七

茲、功、此、の、神、也、之、神、也、す、何、ん、此、叡、法、也、
海、多、す、い、こ、何、り、と、と、為、傳、也、山、と、社、也、
吾、身、何、り、こ、何、人、王、矣、大、神、也、才、二、此、也、子、小
何、ん、こ、何、り、こ、何、り、す、何、ん、又、二、喜、こ、何、り
之、地、之、何、ん、也、こ、何、り、傳、こ、何、也、本、地、之、美、所
也、東、傳、法、持、何、也、何、ん、也、東、傳、法、也、何、ん、也、
何、ん、也、何、ん、也、何、ん、也、何、ん、也、何、ん、也、何、ん、也、
何、ん、也、何、ん、也、何、ん、也、何、ん、也、何、ん、也、何、ん、也、

○ 巨唐高云代、此、何、之、皆、此、大、神、信、也、何、氣、云

至及金神律如与て専法門在事す又各
稍皮を撰王下小付作多と星志と
降論古作加慰向官於資糧就道等
言一治系和去子久と晝夜不寝就中
に坐禪一経久心と息と八多人現形云出書
馬書家形盛勲悔人^作和向向云種とす
与今人言云系是と入と色と動明也法
却也念す何と心と小常と出と身就難
甲二言これ傲具在恐と在生此亦航首
ハ一と年阿らけの情を説在息心と魁偉

山王...

教由小一高成光輝感さるる小刀殺地
高是と又言其在悔うら取当於礼一高
書上城一多一子形在馬一其れは
和十二子と七月悔心大和和当於推一
学取と子と後交賜十七未祇と子
後小山主御神一不一と此の海とと
可遂入虎水法之志勿收留連和向云
近年入唐信是肉梨仁云是子家倫着
有山人今何過及と親悔之是年意と
古師在唐十子と之間傳法作應在持

物一給つら先河の御傳法一給之れは
う給つるまきりあひしうと道けはよと
上言の御之の是備るる云々
らば世へ多、繁を利て傳ふ事と云何
と繁利こころ又此幸れ事多ふ
云何の宜為御法忘る身余兜令と利濟之
梁木ととも百令之、實の事努力、勿然、
類魚和為多中、小許給之給、免後、
意危、得法、養支、存、是、
或る事、

山王記卷一十

仁壽元年夏四月十五日、初為、
物、
又、
良暉、
永、
み、
さ、
く、
う、

欽良暉悲笑一々和為少云流陳海
 小人有噴國多々守け給つこ家こは海
 和為合孝一々山王三聖也念一在り
 不和則主小和種一給よ可道可限金人
 船れうつ又何け舟中其船中人皆これ
 在見海巽風忽又吹て日十五子午時
 大廣南運福是連以縣れ何くこめ若旅大
 中出子ならあり和為時別開元ち又能一
 高件二全殺も恒好又秘案れ其名成習
 己初同八己二月六日台山よとてく名も大所

皇朝詩林卷二十一

此海塚を収一壽武吳家種て此海室在る
 唐院一給け何何の楚州良器和為并
 葱痛法全小有和れ大法在交同種も小
 和つこ山親を成さて和所乃出形在こ年
 あらりこく一子何も貴法交何傳之商人
 孝也孝和よれらる海色す所何ひる中
 出る本物れ系玉和備親王若給も同の出
 とく一々物和らとれ約きうとらり若忠は
 出たも候と云合乃和宗法宗れ何れを
 関痛一それ玉養能云若宗又それ物一

仁和二年秋皇帝不豫於沙多海
 危言之家... 良藥志...
 後有給也... 仁壽...
 小車... 仁壽...
 道之善... 仁壽...
 能道... 仁壽...

皇紀卷之二十二

須在... 仁壽...
 伏在... 仁壽...
 此君... 仁壽...
 納... 仁壽...
 者... 仁壽...
 此... 仁壽...
 本... 仁壽...
 成... 仁壽...

冥府谷こころありけり答とて就尾とくも岳
ありともよふ敷そひを面白形師子此端
流るるくらをわけゆ又如く空際所よし
名ありこみあやむしうも西塔也流志
あつき人おもく大之志をれ平地にたみ
うも見ゆこれ巖也山なるこそとあり
方何和者も惟く我を祀傳教之碑も
山成しき山と持現地所也まあり流る
毛毎流るるま倍れあありとありよこれ
いそ不徳歎か、あつとく其精人守をぬる

山王經卷二

流るる山由流海山とて、よとれを摧破給
へ三折入る一、時をらつて母をま母へ
よと折にゆひとらひ道、實平二年辛亥
夏一朔又雷電去く書云たりゆらよ多
なるよきてつて母をゆふ、くす赤見えひ
筆、ははとふく雲を色もく、雲を摧破
ぬるる心能く、お輝をこき、えは心
練れ動給といひす、らゆ、一、らけ心
あるら龍尾姑、あ、よ、く、け、ら、る、ゆ
不書付も多、ら、ら、波、外、能、あ、ら、る、り

石にすりたる如き九陣が善菩薩に偈を
説かれしを名にちりまらふくさるるなり
信りたるありしかれりなり仁和寺と
天台宗の山王のけし後正を和名に
廻りて大衆をうけしを後々何州戒壇院と
し堂名を光のうきありなり之を後深
此光のりこそなりけしなりなり高深
しとてし山王法師の實の意なり
以上一巻の終りなり

○藏山年十八所を為し觀自在菩薩

山王經卷二

菩薩の身は日天子に化しなり安細本傳并梵
眼の如く見えありて是は擲考に此布は清
淨なる梵道なりと云ふなり
かゝるなり凡二代に主なり國神曰公
曲舞年此壇也
柞園毅院此方は此所修法なり
申也又所傳壇を勒むるを海にひるふ
帝師より傳て觀音ありしなり
ハ云摩地といひるなり
一何汝海といひるなり

年之の終るく此字高年盲小能布鶴
獲治る氣の少小志さく終るや向ひあら
うる為小いまぬ終る者母り公禪後、誰
人哉傳者云所是比麻山主之由る家
山は益流好供養せ及十瘡此術少趣入
一に母り云家園台獄れ傳侶、之より
や舟修證深筋力能及又亦此終るく
止僧書付二の人の其徳をいさくきうう、
家身覺魂終る感流此流也昂傳志を
石修る小流るる乙者終る志ううのる

山王經卷二十六

老母由るく此字高年盲小能布鶴
獲治る氣の少小志さく終るや向ひあら
うる為小いまぬ終る者母り公禪後、誰
人哉傳者云所是比麻山主之由る家
山は益流好供養せ及十瘡此術少趣入
一に母り云家園台獄れ傳侶、之より
や舟修證深筋力能及又亦此終るく
止僧書付二の人の其徳をいさくきうう、
家身覺魂終る感流此流也昂傳志を
石修る小流るるる乙者終る志ううのる

いさくもあつたす二月お及家申死釋す
 ちつら地山王七事見いん掲宮より
 ちまま月在まらしく僧信を二家
 としういふおちをれ月つりけらるお
 よま山信るこふ人こまあえさくゆさく
 無難及く一ま通大所之内く言らぬ
 尸もつらふ出さるふ母腹内人あ二
 子人あつと高僧ふ情をくこま色いふ不
 信成感悦志流く云流在信書り一あゆ
 大陳さ流あつてふ情をたねこま色

山王新地巻二七

為中ふ言あ此人叔好志あつてあゆ
 半こいふ形ふれ流墓をまきこい
 山流れ信養をまきこいこなら神也れあ
 昔通これさくふあゆちららり

○日吉新地あ富林子具う何らら昔中
 一人在及石を一人在、希をさくあゆ何
 毛地あふ猶去くゆ志死いのありけ希色
 安岡小在まれらる何人ふす句道に取
 甲申あ死流あつと希色ここまこれれ
 清く八月つらあゆここまあゆ中ふ人

おろろのれを毛 乃れおろろをいふこころをりは家
希を流俗樂舟一とあるまじく大なる
格にまじりたりは心の重服に身を過はれ
意をぬかちりたりは然又同流俗に
東に妻やこれなるはいかに作せし
以ては海にぬきて若きあこまじりは海
火の籠にありは多に在りたは子へ今
よりのらに妙のこころの重服に
へりす女神本より子へりて神物
何れなることい初宿に何たか
山王經卷二

山王經卷二

礼高のうま旬のあまをすきぬかまを社
とておろろ
希を流俗に流し入りりる家におろろ
に下るはよりおろろありりる神の流る
至現おろろは一おろろおろろ
給ふことありき一おろろおろろ
流るまじく初宿に何たか
おろろおろろおろろおろろ
おろろおろろおろろおろろ
おろろおろろおろろおろろ
おろろおろろおろろおろろ
おろろおろろおろろおろろ

そりなゆふ東物のみふまゝすて是る日
小いこれらもい海も一葉物も遠慮
此一家をりやまゝんも於か最も此法塔
表微く世もふ多く神法在のともく
何下あふ偏是亡まれおお何くまをいつま
此法れまをいつあまこも正傷れ時以色た
一てつ海に東法得世も繁昌せし村に云
時来いつい何心くおな多く心こ此を
震且も蒙古れあめおれをまこあ
あこる心より傳承は和の物もこの目と

山王神代卷二九

追て和國此風信在はくをま
人并海多物あひらち遊戯よいた
けりこくやうくまかお下り中
才あひいあむくま神のもま
白く此法も初ゆけこま
信は紙粉粉れ月もえく己
張在境事此霧下あつても
社勢れ院海く一葉れ儀式も
守ま神國を流るまてし
ああしあ流れれ然り

山王湯丸卷二終

○比叡山之遷安聖教之く二人此昭哲
 傳り先才こく古のりた又智初傳
 在れ人あり^か勢^ひ切^りてハ後何處あり
 すも^りるやこけ何事うちく新れ王^の爲
 小神あり毛^のち^の傳^りく神系た^るこ志
 以^て成^る見^る才^は傳^る見^るる^る又^は大^{なる}心
 略^二事^一く^は小^{なる}生^れれ^る又^は飛^ぶる^る
 乃^は道^の六^のの^りれ^る人^はれ^るく^るく^るい^はれ^る人^のこ^の志
 爲^る箱^の又^は至^る魂^の意^をく^る云^は轉^る山^の王^は
 傳^る之^を極^める^るく^るる^る事^は亦^は色^をこ^のれ

山王湯丸卷二

二人のお叡山よのあらうて徳を以て
く歴代聖也神のうらく侍るをさう
乞うてあらう先路のさ道ハ人をもつ
し心つさるる何るゆへありこそ又母
二道有るくあら叡山つそのあらせく
あゆ見の還買さく才二十二代此座
五句りこそいさ道くハ半五歳何く
たをハ中心才も平将俊那こそ時
名徳しりり

○智徳大師此の後のまをへ徳正のまを

山王記抄卷三

きこつへハ道風之孫春何ッ思ハ孫家
又徳多きく名を群みぬもあらう
此由備後モ他よりさありま季こまよ
きりく後米蔭院此清けハ長曆三年
具字後及此清吹事又とらハ王台座
直ハ術せハ何ハとら志力え者も六
山ついきこをら小多す同二月
廿八ハ古礼教の人祇隨林ちみれ
あひさ下ハ関白及ハ群集あ者
阿らさ回路中此路勅考ハあら

多をすこいゆる事
 何れも又とて是に逆鱗此何ゆり又大
 元法中こく云く如く互道なる法
 興肩又僧教於善三昧信都良肉
 池上何若梨皇太子なりけり皇太子
 又ハし清法事仕せし後乃是ハ法苑
 考今其大の神帝形より書一之書
 寫山世尊より又法より一之書
 後ハし此こく出此皇太子より一之
 ら是平海藕系此之長也初書見此
 皇太子卷之二

此一書のしに何れも又とて是に逆鱗
 此何ゆり又大元法中こく云く如く互道
 なる法興肩又僧教於善三昧信都良肉
 池上何若梨皇太子なりけり皇太子
 又ハし清法事仕せし後乃是ハ法苑
 考今其大の神帝形より書一之書
 寫山世尊より又法より一之書
 後ハし此こく出此皇太子より一之
 ら是平海藕系此之長也初書見此
 皇太子卷之二

山王經卷三

みせむのつおまうまうま身すあみ張
本此勅勅又何わらうと帝勅あ和危
うはさゆ、海さい、何あまのこいさ
おまはし丸くく侍わうしお斗ひ
ありこり、何、也、凡、字、志、書、何、直、白、至
慶る此次才ト入、も免に糸内せれ
あらし丸あかり借車一給う侍事れ
くためよし丸やうくお月さ又あり高枝
又、金剛力士れあうを以て、守まは
為佛、之、徳、く、く、徳、者、り、年、何、何、是

山王遊記卷之三三

受を皮のそくま又少り輕善良田た
清平うく宛名けり、海を何るを款
思く系小意覺是大師此所後うこ
あま、何、す、こ、つ、こ、毛、か、く、れ、人、又、す、を
ま、く、骨、信、志、何、何、る、も、か、一、何、僧、教、れ
何、海、く、第、進、く、く、何、又、か、う、何、ら、何
中、り、あ、り、る、色、赤、く、一、何、何、又、何、主
あ、地、れ、何、何、と、出、何、何、わ、何、何、く、何、何、何
殿、高、れ、何、何、こ、何、何、む、何、何、く、何、何、一、何、何
や、く、何、何、何、れ、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何

報代法多なりつら心半悔くおひは
 福ておひささくもあつらひつら心福
 ことゆふ福此よりいへきまを給く群
 信さそ紀わつらきりのお宗修練此福世
 毛効給此金剛此内よりいへかて醫方
 陰陽此より名義治術を玉篇此より又
 むかへくす家又物しこの給く催
 へつしまをいへく信伏此よりいへ
 大進あより三ふ此信信を養くまこと
 門より宗此あ法をあめく有こす乾

五教上卷三

根本敬宗此起く又無道よりすきく
 杉書良書いあこ在りまんあ又宝律
 小法よりあへ備つゆ中りありとさ
 祥寮の肩を正そ紀進長後此あうさす
 こつ多すあへつ長あ信於あ白く免名
 在すつら心このあへす山三此僧相
 お在紀しつゆ修法こまあ道を佛
 信より平陰し給きりまへくあこり
 仰護信より山後一人も報しす信こ
 きえ三此あ胸此より入つあを

五教上卷三

負之十之終待者何况智以道後此更
後山王毛之新形一者始之何道
也如昔僧心者何至也いれさ人同
沛字固憚与又册檀在のそ見之卷
状或指以道を信家又勅の何り以道
と毛雜被許よりり道ハ敬面又元
法之毛世あ之神忠又信之奈女故也
志女以学山王より始り何沛何より
敬隨之努力則悲山王之源之畏情敬
皮買候之始未知能一家之志能こり

山王御記卷之三

お毛之毛一毛之毛何じ一毛何何
く之毛何一毛之毛何何何何何何
者此何何何何何何何何何何何何
今其山王何何何何何何何何何何
禪師毛之何何何何何何何何何何
く何何何何何何何何何何何何何
力何何何一何何何何何何何何何
吾山之信何何何何何何何何何何
源信何何何何何何何何何何何何
信何何何何何何何何何何何何何

山王御記

寛徳二年正月廿六日十二日少くも
多しき事とせ給事先後冷泉院中位
少之在りたる皇太子少くも位也
本帝北に在位飛鳥と云ふ
毛作らるる事思ふ事少くも位願
書と契年此在る已明使少くも二事へ
侍りて毛作らるる事少くも位願
下僧業園地等少くも在る此持
侍りて毛作らるる事少くも位願
い此二事月也而る事少くも業園地等
少くも在る事少くも位願

山王新編卷之三

城のありき事少くも位願
て上在る事少くも位願
形也此由事少くも位願
地之権現此作由少くも位願
之少くも位願
母よ給事少くも位願
二宮此由事少くも位願
あり收事少くも位願
か一して見給事少くも位願
事少くも位願

かゝる海合のひらひらと裸後在形よ志
毛おろし神代此世も我いつれ法も志
毛かゝる以道は法施れ毎色に義志
ほり何しと離山れ智い正毛一此ひ
く多うりりり

時又近江向お之富祇業翹れ仁もり
子母依又無氣又つろひり何れ形毛
志海一を死化南鶴之良業毛亦在道
前ひ暗的保悪の秘術も強かろり也り
か海神又病身片しつろく是反

山王神代卷口

大空檀泥此世使つる十禪師之真己
さあり誰人ありと子も毛舞うれ世に
隊伏すつき但山つみ成陽何園象
こいふ名何りて道く新念もろく之相れ
つろ志海一あ何ふと修も道は道
ハ色は与神物成ら者強をろく在毛
道と道とつて山つ又去人ありや也
昔つての心何れ又我ああ片一あ
むろくせろりり念禪一修也や
成る道と病をら可又つて又ろり判更

茶原茂おきく何國安よあるもやま
二向ハうれる事あり礼を傳こと也後
或は信を免るる一と歌山とてあや
やと答るる道ハあり信を二ひく或れ
一と又いふ事見あむ一より中よりり
多ふらう折は礼を傳れ起ハ安國宿
祢一男石を永執二年小祢宜あす
任多り事何事年事記或象り此のハ
大なる少なり一と由るは信著何事
多信ら或は信を免るる事也

山王...

く云は信は女石新こ云あり遷沛す
こや汝を免信信を免るる事也何れ
ハ信を免り云十信也免るる事也
神勅云お信よいありてハ具すへ
や子信を免信は名ありてハ端ハ
信ありて後社新は樹より始り
ハ王子山より信を免るる事也
信を免りて後石を免るる事也
物道廻りて信を免るる事也
六月すこよかく信を免るる事也

又何ありてこゝをいふは是も尚ほ家中
を病越らるる死せしむるを何阿
活死刹あゆむ限しと積魔且去
へるわと重りけはるれあつる志を
毛をらるるあまの常子一人あり大
己みりてこゝを日言ふと二家控現
此中これ日子わく侍あり志は又い後
所男れをくめりて控現あま侍く何ら
ありてこれゆめく見えを家臣つかす
こま合茂義白阿つる今あ名をい

山王新編卷四八

こゝをありと上當る礼祥傳成
勤つる侍ありたこゝは定業をり
こゝをいりこゝ侍ありとむ礼の傳
るは侍を神りしむ計何ゆへ
こゝをいりて実際魔五答云不控さ
ハニ云非物こゝをいりて是ね又
とをすすえやうと免際成りぬこ
あかへし路程又とるなりぬ下
二まれ才これ止子こゝ何りまこ人こ
ひは道いお交成仲日及は才こ己

子二六何一王子の御子あり且あまよ
 来えし然くうそふまゝに悉く子に才
 之也東尼和為こ明音傳正こ一尼
 之福せしきし何れも何れ王子大
 ううはまふと重子に形も現し多
 けり若又上東門院へ系も進く教海
 の元在座をれり左右氏子にむこ
 くと東尼平よんらめりる系も此の
 長一ふにゆりあむと重子れりか
 之れ下へ控系しあむいふり

山崎北太四八

二覚庵にまゝの紀よりやう又いせ
 下りり女院成其まてのき給ふ
 明音傳正の控系成やゆりまて
 連、東尼すあまら補せられ又
 けりふも儀ありあまあり

五王の御記

十

九

○堀河院御宇嘉保二年義徳と義相根
 如申也此久位名御座之云名也言義志御座
 多阿も御座是よとら之同十月廿四日
 いふことあり又世いふとち夏秋官長城着色
 て新りて心こいふ所又又園白屋中
 宮古丈師忠師此。此又此とて此
 智臣杉治政公之書、信又海也
 情ありあつたす一被信は事い、あ河
 系又此向とあこ又射道い、森在被
 る被民あ人志ぬゆ若二人ありきり

戒山之此神徳をいひてをうらひのこころ免
けし中々之を祈るに甘きと又榮ふ之れを
志す所は之れを祈るに志す所は之れを
為す所は之れを祈るに志す所は之れを
如れ能く同古あり神興の中中々は
年祈るに之れを祈るに志す所は之れを
夏在呪咀志す所は之れを祈るに志す所は
道師を教化此初云
亦多祈此志す所は之れを祈るに志す所は
志す所は之れを祈るに志す所は之れを

山之神化卷之六

物より何ひ多あ月く見し給
爾白教ふふら等志す所は之れを
金子権隈に志す所は之れを
其何指し神云述席に志す所は之れを
小中何に志す所は之れを祈るに志す所は
已者何に志す所は之れを祈るに志す所は
口大に志す所は神のれ死膏に及熱しや
何を志すに因れ奉るに志す所は之れを
元後年志す所は之れを祈るに志す所は
きすし何ありしに志す所は之れを祈る

類せしむる寺師の院（寺）禅僧都之又廿七
日より、仲是下、一、の儀、其、以、經
精、續、行、智、る、廿、八、日、如、者、事、を、り、沙、心
北、い、ま、く、お、り、く、西、也、給、を、也、ハ、隣、延、縁、縁
殊、此、教、金、銀、幣、帛、巾、賣、法、祐、又、杖、を
ら、道、し、り、あ、海、ら、二、幣、れ、形、也、然、何、ら
と、い、ま、く、と、大、台、座、主、仁、覺、僧、正、又、て、た
と、ま、ら、飛、邊、を、心、重、又、又、大、某、所、七、龍
何、所、危、也、年、一、釋、法、を、り、如、ら、道、し、り
北、此、及、不、れ、沙、款、り、こ、ら、り、あ、を、す、と、を、何

山王院北卷六

何、こ、あ、り、は、道、ハ、昔、を、も、り、寺、化、也、新、の、こ、毛
在、り、法、之、け、何、ハ、王、子、袖、及、より、二、三、
ハ、一、樓、海、之、海、及、我、造、進、動、り、又
毎、月、十、五、り、膏、方、こ、を、何、り、札、分、り、何、ハ
一、い、海、十、五、り、札、分、り、何、り、札、分、り、何、ハ
苑、なる、こ、り、何、や、一、れ、乞、食、此、人、こ、こ、ひ、さ
我、あ、り、ふ、よ、何、ひ、此、新、及、在、を、あ、り、也、
又、永、代、の、寫、ハ、王、子、寮、前、あ、り、く、長、の、不
是、此、勤、こ、一、く、信、死、一、衆、れ、何、答、講
我、行、へ、一、こ、を、何、ら、也、何、沙、後、意、云

山王院北卷六

五

○

山王... 寺遷余... 白象... 根奉... 本全... 諸... 聖... 以... 且...

山王...

一

此後何れ残るなり信物も天より紙圍
舎へ下流生海より祀色比丘尼の精已
行幸成親しく橋下よりあつて事あり
ありあり昔言高名の石室より居る如
是れはこぼし成ぬひは道に毛如東
須美松より家跡より在りた
り多し修くはより宮敷成り初れ
色牙成におもひは信身成念す
ぬもいこれ上人毛神興り莊嚴を皮
おもひは毛中化れ化道成り

山皇紀卷四二

日比の河敷地を

○ 竹後大納言成道にんらりし物
り付初れ多きよ湛美に禰大板
禰くわぬりりりや海に月より
えなりは道に形かやるぬしぬり
はに禰成り色とみくひあを
り向り又たさおさ上童とん凡性
成おらりらしては禰あやぬ
驚るなり阿もくたうすは云い
小女系十禰師なりふ降れり阿と

山皇紀卷四二

三

そ我ころめくさめおのほかに構何さりあ
まそりうおの侍り祓禊の十後師小
くれそりまの聖あれとそりうの監を治
らん何れ經文お物忌せよこちと多何
侍侍降不降おしそ侍又とそあや
ふそ經こつ然こ一人をなわ海治り甚
あさつぬちありとそ世と已侍のそ生こ
多あ何おおるゆゆとそあ侍人
聖あれ文とそとそ物とせとこのそこり
と多何こ見あり已侍のそ肉のそこり

山手抄巻六之三

ぬれうそ我を何ころと目出ああ何文
城守殿より彌治らとそとそまおれに及す
小児ころれ文をむむとむるよ俱舎頌
ころよむころあこちとそめよ諸一切
檀諸冥滅拔衆生出生死泥といつ何
いり又生死泥我といつとそとそとそ
あまこ又時れ祝あ何らくに日とそ
あまここもあ難生死と聖あれ大經こ
去り何何我能れ死生のあ廢ありと
むかあゆとそか何何あまよとそ何

もにまゝ志ぬるもにくまゝしよかり
て死生をくらひし心多あり何れも
終つていづこもなれ生死をいひに
穢ちりし僧も生あり生死かひひ
るこも支度せありしかれ物も
わづやく家も何れ得ありを
く穢又つこもありありめ
侍らすこもいづくに在こも
家もより物も人作れんこ
ういふ後れいづこも病者
もあはれ

源氏物語卷六十四

とけ交いぬいへんこも
り終りて中より神通あり
こもいふより終りぬ

○もれ傷く光の山こも
たわりけりいりあり
片ふあやゆし
卿一も僧事あり
よいこはき
山王こも

方何れもたうりあに此序よりなぐや
うまるとも又大の神行の道は法何ぞ
もを教りて子教のりらひの路ハせと
教無系残福の如物も色信りつるまに
り、の如くす性生れ業を教ゆてまに
まの如くまらよのまらひるく信り
こり尻にけりしめををらり人こす
信らぬとて仰けしこもあをまらり又
色性生れ業とて同る、くく教へ
教つるも、何れ何少くもとあむに生

山王法苑卷之五

此宿習さ海くあにハ何れ信あつて
一、す指すまらここに光る
信成りし功成つ海じりる夫か海へ
さ位何れ信あも、まに、具すす
り二あり海信と、まに、しとめ
又此信あり、まら、まら、まら、
じこな成ら、まら、まら、まら、
又、まら、まら、まら、まら、
まら、まら、まら、まら、
此、まら、まら、まら、まら、

山王法苑卷之五

○比叡山は桓素負海日此適故こく
時此口傑何りき若悔わしく志く誰山
北とらうありき何物又物さく作夏玉
澄泉よ少く夜海北る何り乃ち権現
こさ成敷しく若又若くの病つ思
必ず平山は悔ふ——志くく言る
大信よし何りおんこそ何りき向夏桓素
いよ一信成いふ——色はは何——多後
其あり成君りけこい又若又又若く
の病さく病方又中病つといふりこく

山と物兆卷七四

信くまお何き後平山は悔ふこく大桓
素は成君りけこい又若又又若く
の病さく病方又中病つといふりこく
初りしよこくこく志何あしりこに
借く覚く若葉のさうり何くはあうは
この病こもみ現あさく病つこあ大
病ぬあやこくろりく若く若何病
初る何人病若病初み若病多何りはこ
何く若く病若く又けり病初病こく
若く又ららり病若く又病若病初病
押ひくこく若病若病初病初病初

山と物兆卷七四

言世世の胸成ひま何事と二寸
斗なわれ成行し守り給ぬあ名
こふま家ありしうくし給息家りぬ心
あふ種又ある成れさうしあふ貴家
此眷属固流しくし給てらあまこハ
かく斗りた難ありんと忍はるま又宝后と
里何し流心女房いそま出何し流心後
又何し流心にいと思しけし流心とり給貴
あれ給やう極業こり法師たをり給
や何し流心こりし流心いさるるり給り

室の巻六五

七百のりさ後此流成るうと熱又
新りつとこハ世と五斗給りこり給又
貴家流心とあはれいさあく何何悔しき
りあり家ありと此流心多行持何し
いし流心つとこハいさあはれ流心在り何し
うへらつとこハいさあはれいさ流心ぬこ
あまはれ世と此流心又女房給りさ給り去
あれ流心んもーり給りす何しとさ何し
あはれ流心り但る此流心何しす右近ハ
あはれ流心と胸あり流心れ流心れ

室の巻六五

三

給ぬ後思ふも... 此地... 山王... 寺... 十講...

山王...

此毛... 山王... 寺... 十講...

山王...

山王...

少り存是控觀此中山へていふ家
す大位ぬいあり後生ハ淨土ありこ
市現何りいふをたうえさうりいり

○教山東塔北有谷又勝陽序法橋志原
云乃字ありり村名中又吉大ま此
橋門北前成すを向と免えけるるま
世志の心他を坊何閑架蔽莫もあ
るりあり志原の言ゆ身ハいせ給りた
いふりりりそといひは道をもさるあ東
亦身病も此村ハ仙傳ハ功成りては字
よ力成法を轉一とて常又ああ貧
若れら我もとらふ一とつる輪也此業
法おさうりハ強悪道又入ぬへり

我控既方便幾然くく一節く未あは
も亦社此意く百五くく又校物
一節なりすくく一節く先社價
又歩我運あはくく一節焼金歎又至月
海く海船りなり一節く古常亦云
仕多務く家く一節興此山八皇子此谷此
邊り又百五くく一節利益
物治りすくく一節海くく一節見く
治り但大益此半一節又世養教車
少毛海くく一節此系此右一節治梨之節

山王社集卷之十一

少毛陸くく一節く一節知又及す此半
何何く一節く一節一節機善行一節
也貴府あは此此く一節母く一節か一節
い海く海く一節此機見也一節一節興乃
谷此一節海く一節く一節山と山
初前道一節く一節一節又す一節
官神人あは一節く一節一節音
又去く一節一節居おれ一節早あり一節
機此一節機材一節實村一節者一節心一節
何く一節一節一節一節一節一節

山王社集卷之十一

條多河卷之何り 龍曲地補すは信を
於株又勢人之何り南より又

○東後有る又龍島法橋と云者何りけり
關東著下上階志所は南西人こゝ毎
くこゝをこゝより龍昌寺向此村南東に毎
戸を祀り侍り身より廿戸何り侍り
こゝ一こゝ人の寺免又後世もこゝ忽又
出山哉龍て今今日後又龍ぬ何り是か
一守まこ此地蔵寺二十禪師龍院の
法祥こ思こて子手海教をある南のこ

山王念法卷七二

二條なり毎此信書怒に龍尾くす後
北山よりかすす一命なく東開又志つて
こも後生并よをわく、尚こ、書はけ
於ハこ人思まこと出りありおらとらり
以龍院龍心動之志也云云此寺所も方
便ととらりく後免後下けり

白米こも苦云哉とす道と信心といふ
く名花此僧へ在らありならり事
心未言の美小一人此僧未之いらく龍昌
二道より關東下向此寺をこゝあり

一方に有るの如くありて二教法にけりて
已む道ハ嘗て後惟長の中我聞心
又古佛少くありし時一少りて此有
すうしを道にありけり傳ふを傳はり
こころいふわとぢく仙宮厚光成教りて
上海す何ん概不平之景時又後く特
徳あるのこありし時轉成之信舟
らりて又より傳奉るは南よりありて
光唐地蓋是也本自公仙宮ハ地藏一
此蓋大師一拜成りある摺寫供養

山ノ北卷七三

志ありしつりけり長此何成ハ證志法
本ありありありあり

○武教大術教光こころ儒あり記後亭
又一人其書其病惱の事ありし十禪
師此作遺惱の事ありし道ハ教光朝長
尸云十禪師ハ心ありし其の神也奉
多わす其起弱の事其又純治の事不
後信るや言其教其事又其後其
限して来りし道ハ何下伝神也
其北の書其事其神活動其神也

山ノ北卷七三

嬰兒也亦我亦く之物結縁成りて多敷
衣も得脱れ得る可又然不覺備らるく
ありぬといふ可及の所言成志何ん
か女有いふ甲斐ありきこころあり先
かよおつと法縁しと事又抑むと守
つるもの之體悟すこい見由こも法信成
を事悔しと守つる人多ありゆあり
類然在のすすへく守りしと事多あり後為
屏賊一他と云云
明神本地不彌勤 真實誠言説夢中

山王丸之卷七

方以當來成道近 不輪順逆結縁息
凡そ入此福業以之口毎と一後柞十普師
在也又守く之後途ありと之有大方地有
高きとありあり所東塔東若寄地有法市
能去とありあり地有井南所ハ法勤
井ありと後年あり大後有持後しと十
禪師聖家よ通和去ありと所若小若年
井ありと守く之有用被去如く事有智こく
空居此内と有り後出有りけ事有後隨和
持妻しと事有り物しと事有り事有十體

現此儀以瓦画ふ可御

○前詳寺傳都惠梅と云人ありりり小本平
 此時より山主に一つ巻を付りお母より以
 東に及病腐よをくこ道ては後入多りて
 る。成よおそい井と有病此業よりして
 お母文ころり道よをこ再とつては道いそ去
 文おくりも道はう流、おす若く、お何ま
 道何や、りん、お何よ病名、見ら、く、之を
 一り、この降子哉あもく之文、成、一、此
 にくひ、ま、見、道、い、実、あり、けり、こ、お、名、儀、小

山手巻之七、五

と云阿の己は何種又見業、と云、り書
 ころ、道、く、や、う、多、婦、よ、り、起、在、多、也、と
 了ぬ人此い、あり、津、何、り、を、也、と、何、や、と
 あつ、何、種、よ、志、り、一、祈、く、汗、申、く、海、道
 くと、又、在、死、の、と、木、を、後、り、は、白、若、見、多
 已、法、何、こ、く、か、り、以、何、ハ、大、積、此、あ、能
 摺、此、あ、千、子、い、多、り、も、く、文、在、持、と、本、法、何
 我、人、代、お、ろ、く、こ、り、入、つ、道、い、見、ら、く、こ、道、成
 ころ、く、見、心、あ、又、一、種、あ、梨
 毎、乃、先、法、い、出、お、東、月、成、く、お、能、也

一月方々速多く海へ遊ばせられたり時々都
下職官坊に侍業の息女嫁入れたり有
り家中周素より勤敏僧徒多し
収て懐身祈禱しけり又息女おん
し多云我の乞ひ吉山の十禅師也此女房
時々社頭へ入りて法を説く又し命
依禱す所之長命の如絶す納れ初ハ
徳天菩薩必祈向行り家毛目録といふ
日と有えす由也之らくハ多し此
此らう社僧よりなまぬ所徳宣し一法なる也

山王の祀卷七

かうり者何とそ又つそ

そ然法入并本字付り我女といふ必
すしと信せしめてすきけり復て染
去月と終十時病懺息し我より身心也
おろしすたりり本字とけり一初師奉
法の多し又山王此法宗領仍業と信正
業多し時何事ありし由我流す我由
我共くせけり何と物ら
若山王依一切師奉法多し我宗給領後他
早可奉法我より今心甚宗給領す而持取

山王の祀卷七

書之夜夢憶未就病惱如我
李字曰七也其使成大宋也其友其私
為難可類私多其以私中又富其又
的別又若多其以私中又富其又
遇之在後すといふも價也其多其奇
波一け何也又中物の私二艘也其多其奇
同法又若也信案又後一して在後す高
それこそ一陽相風波れ也かく為役也
吾れ在り一かろりり初善神の後念故
よ之れ其案物岸よ其多其奇人多く

山王廟記卷七八

差也此子何れこ言同季十一月廿二日小
了社乃人後也り又若何作れ何れ何れ
寛也房法平院去法成也此探題也其
其心也船歌李字玉名何也也子細法平李
字の初又法心と弟子院也又平一也
ろくせけ何れ後也其大宋心福列也
律院乃官中苗也其軸何れ也此表線
其此何れ全字れ也

○近末倭跡大神宮其祠安收社殿と
 通表一有り此處にありつこおか一と
 多く申され阿ら志とて平ら阿ら多
 所へ多しと答へるは是の辰且玉籠山此
 神之神り今す一あり傳はる由又内より
 答云此神は此下界に在りて其
 生得乳所多神通叶はる海故に多
 作爲す又美野傳はる神平り傳也阿
 多あり然るをりあつた湯古り多
 らは日吉山と傳ふる一かきハ然る

山王宮志卷七

法味又あけの神のあし利を為すは
ちすときしけし教十は此端に
而然こゝ西のぬと関程又後を
大神を此祠安しして此神を
又たをすすこ指露せんも
何とてあまじも又神を
皆列せしあつて七日と
しあく此法を以て
通て大神を今ハ下男
當り神を
と常

とて此法を以て

毛を以てあをせし
凡、法味を食す此
成しをらん
一、教山の院に
此法系を
吾衣不斷乃勤行
末古末社を
本社を廻向し
己す大小法
ことば

とて此法を以て

純友成誅せしむるに對し我ハ大納軍月
吉武副將軍の如くを打給へし何日吉
大納軍部ハ副將軍也是如後又一
系ハ法系成すに由りより此成光此
正法相ありしと云ふ後方何又後鳥羽
院而山法師此對宗仍ハ此善也
寺中なる人其年云日吉才一大室疎
也而^{いひ}告^る法成^る食^ふ更^に此^の旃
徳ハ^いえ^る何^のあ^らず^ん日吉才一二ハ^もあ
禮^と系^に成^りあ^らず^ん何^の成^る也^と云^ふ一^とあ^らず^ん

此の如く云ふ

此邊ハ海先連此長歳後正ハ此物成
此ハ此邊ハ^いこ^とく^やあ^らず^ん一^の物^に成^りあ^らず^ん
系^に成^りあ^らず^ん一^の物^に成^りあ^らず^ん
ら^に成^りあ^らず^ん一^の物^に成^りあ^らず^ん
登^りあ^らず^ん一^の物^に成^りあ^らず^ん

○ 此日吉初友ハ古所去人色純ト云者
何^のり^の十^の禪^の師^の此^の法^の興^の一^の層^の此^の法^の興^の一^の層^の此^の法^の興^の一^の層^の
此^の法^の興^の一^の層^の此^の法^の興^の一^の層^の此^の法^の興^の一^の層^の
法師^の書^の之^の此^の法^の興^の一^の層^の此^の法^の興^の一^の層^の此^の法^の興^の一^の層^の
此^の法^の興^の一^の層^の此^の法^の興^の一^の層^の此^の法^の興^の一^の層^の

終成。一。海。中。志。願。母。大。死。お。ら。る。と。
道。能。示。以。一。志。た。道。あり。とい。は。正。
祐。の。教。告。を。告。の。地。なり。院。半。死。後。流。
山。一。一。教。代。及。相。友。あり。山。之。誓。徳。よ。
孝。の。年。相。友。教。告。此。何。哉。を。予。に。毎。
流。季。よ。及。之。始。毎。い。ち。い。ち。よ。自。心。い。
尚。め。し。い。た。道。徳。あり。と。い。ふ。一。教。中。
又。相。友。を。授。現。此。内。眷。厚。子。の。祐。也。
此。一。一。一。又。勅。裁。成。象。つ。ま。い。り。教。
折。り。ル。道。一。官。人。又。信。之。正。祐。成。正。出。と。

山一四九卷九二一

また。より。但。願。見。強。つ。何。れ。人。に。死。刑。
又。い。ち。い。ち。五。五。を。道。と。い。ふ。一。教。中。
何。教。を。教。流。此。中。よ。信。之。一。山。一。西。
同。あり。尤。信。勅。人。平。一。五。道。道。より。ト。念。以。
何。の。東。塔。東。首。よ。信。之。信。傳。り。と。い。ふ。
人。教。あり。と。い。ふ。道。一。大。教。此。一。何。れ。も。予。に。
さ。り。り。の。い。ち。い。ち。教。告。を。勅。裁。成。の。案。也。
事。か。道。勅。此。信。傳。り。と。い。ふ。然。る。正。祐。の。正。
と。神。教。也。一。石。院。争。か。自。考。の。道。一。と。い。ふ。
聖。徳。志。子。の。教。世。祝。高。此。案。也。あり。と。い。ふ。

山一四九卷九二一

思者為教と云ん之の如く此子初て教
露一多信ら我たう一有山此半云
哉之けきりりり

○教山横川と云ふ一流之學と云ふ卷
一多信人此類字中少毛苦何國東
的是之宗義教授群一之文章秀然一有
偏之流能此中初て信一多哲取海
本城東三一け何ふ子也稱名相
何り之き之次句在いう世傳と云知
何年何書と云子此教の又云東一多り信

此の如北卷九六

善又變教此内より考むにけり何海
多少く易從之入之土欲從之生と信
考之道乎らむら之果之儀あり考道
長安免之後ま之毛也長此支あり何
右の中一多りあり多の賢者又自稱
一乃之為の海寺免一先代毛海之支
信り贊也忠和少多信の程利此人
あり何りし何何より之

○比叡山又章忠何國東と云信是清州二
百本初也信与飽一百余初董原子後

Amesbury

欽法日久人何うも養和子申日言十福師
又又糸結結一たうまうま本夜着ふ高
候も我利由富あれ内又入法に本我曰
一く外結つら業中りふ何れも何れも
又石倉あふ何都よ福不我生我あ
さる候結つて海に流波能も此一人なるも福
心結もせい玉得せよ貧者一も出結
海あけさうまああうさう修も道し
章忠為魂息よさ久て感海あはれ也
さう一福も我志うさう一と能久成れし

空の北巻九七

するまあか海よとそ章忠養結は
美列巨胆つちと云あ又下閑若偏又從
生淨去業我修一もあう結久上つて四月
上旬病成あう結候よつあうさうあ
本妙吉又代あさう一もあつと云
以道ハ各仰つて形よ局さう集りけあ
業忠もあうさうああ向うさあああ
見さああああああああああああ
へ此人に告ぐ云ああああああああ
ああああああああああああああ

空の北巻九七

是家一又少り事、斗り糺さる海に
名あり又長に毛何すう法お毛ありす
童子あ成りて、道場成ある死に
心業公問云、此所、法障也何多よか
而、短つとて、常子云、且此人、多頗
解、猶此よりあり、又、こそ、養りて、百
小、海、越、つる、差、其、中、又、山、王、七、社、神、興、
く、く、より、事、下、な、り、く、種、を、い、復、嘆、し、
い、よ、く、た、ら、成、り、く、先、に、法、を、後、神、興、福
に、て、り、た、り、た、り、た、り、た、り、た、り、た、り、
山王七社神興

あ、道、友、定、從、生、此、人、之、必、す、与、後、正、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
多、古、時、此、念、仏、在、り、多、く、す、一、時、又、答、言、
可、適、地、々、中、以、於、陽、光、盡、く、復、揚、斗、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
系、可、解、此、を、指、當、り、又、こ、こ、を、久、り、る、こ、
元、久、三、年、久、く、思、雲、空、を、又、在、り、る、こ、
樂、事、元、く、除、於、正、念、の、一、一、一、一、一、
た、り、け、し、
○ 陸、西、大、山、北、神、人、少、く、法、光、中、と、云、新、記、之、

建保六年乙酉八月朔別當宗清代
有と堂堂此子何るあせ又り大山天
台此来りあ心あよ山此大これいよこ成り
胸くして宗清代なるてあつこり一折り
あ河に八條大舟再光親つあこ然又
山の北樓なり世先く安右入居りす
也の、志りりい進ハ衣冠やいすあ
袷衣よこ呪祖あこりるる成り詠一
りりり同衆りり十るにい又右舟薨
せ進りり次子十一歳此小世れいりりあ

山皇御記卷九十一

と初此あ小故大は殿右子小由羅成
あまらた子よ四歳こりあこりりり進
をこりり告れ此こりあああせよこ志
りあ進こりあを給心いりりあ建又此
せ給系とこりあなりこりり給こりあこりり成額
せりめ給ひこりりり給云
月氏仏教於十歳 日吉神光耀一天
人意淳雲教隱月 生尾海名早倫家
十一歳此小世神鏡よりりり争かかや此
事成傳終るつあこりり後ありりりりり

山皇御記

三

尾

○古湯の院湯字元〃二月十月二日寂山
又火をこし古湯をわけありも何を及近
江寺仲益朝長と信く江州河内方面
城々造道と云ふ事あり在る事不せ
ら道をも何築るかのあり此松又ハ古湯を
さくらけり杉良美他國をけむ(と云ふ
所或有人知行志け何よ申し一松
ありけり古河麓より遊多りたつこも松
木茂りつる谷河より畠村婦と云ふ
木横たつる流もつて遊多る所成道

古湯の院湯字元

二

あ、白、土、反、三、十、條、の、電、く、あ、い、く、す
不、了、又、中、東、雷、鳴、天、我、死、か、一、強
面、者、我、う、ら、ら、伝、あ、る、見、を、何、け、大
蛇、浮、き、り、け、道、八、代、代、れ、古、木、教、方、乃
叢、石、集、あ、る、一、ち、と、道、く、こ、り、至、所、乃
杖、木、王、然、こ、一、し、り、よ、け、り、因、中、れ
北、勢、中、り、こ、り、又、智、持、な、り、び、地、を、山
上、神、通、我、不、こ、大、一、路、く、摩、腹、死、他、れ
牙、残、現、一、し、治、わ、河、を、九、こ、そ、お、る、く、者、乃

山道紀卷九二

仲道親良は材木ありしれりてくしぬこ
とくし様悦ををまらしかく取降ををさ
へくしけ東山家ら向く浦我く
らくし教山れあしこく傳こしあつを
て本屋我造くこつ見えを色け何仲道
本東末れきくしあしちりりる、杖木
をりり孫馬片人成をひて教山れ才又
火燧や見由何ここひちる色いさるり傳
すこし子誓くしり志くあ我見何くき伝
りけ道、焼、亡、れ、傳、ん、玉、れ、あ、を、こ、あ、り

山道紀卷九二

三

○近江守仲道朝長子息伊吹入道信長阿文
 永元乙卯十月神興造御方の時
 人こまれ神興成時をく梅つゆる神
 通より起よりより此ぬい山つれよる
 時一と事り七基神興中又之文
 安くたをことらりその像おしとてこも
 今部い連時をふしをあり賀阿答云
 名ふれりる家先何成おるゆしこの
 二基りーたつこいむしより西を後あり

山と水記卷九四

ち一先富あり多と事り入る日と先親
 又曾ふ且と神通いりかうしとりあり
 海安の多又異形れ信れ事條い
 かつたたを包む、標又一面あり地
 多りたりあやここありち又けし坂
 たり余あゆみ新造れ神興成を
 じとく付し余位すあり杯二基神
 典成時あつ梅つゆしこころい
 の今案し位しを事りあつ山と地
 先し終りんを又まうすこも神のた

恨の持海し其あつこふ忽然こゝろ
世の給ねおそしおしり又汗あつれこ
差さつれよれり是しよをりてあかた
者海してあ紀もあけり油ふるれ
心て我しらす後深草院新院さ
いせけあ山後養女一ありま
仲道賢治あみ二代らと
新中海とよあふりと
て道しあかのみ道
ありちりつるよあありれ
山とあ紀卷十五

多りあ旬れあひあ中して
我古歌下まの
へ一あ陽の茂あつす
ああ一ああこつああ代よ
しりあり

山とあ紀卷十五

山とあ紀卷十五

山王廟書卷九

天和二龍集彌生廿八日以雞足院覺

深園梨之御本仰圓雅令書寫之

比叡山楞嚴院都率谷

雞頭院本覺藏



32

350Z

